

クラシックバレエを題材とした初心者の身体表現獲得過程

人間行動システム研究領域

3804C091-1 山下麻理子

研究指導教員：野嶋栄一郎教授

問題と目的

生田(1987)は「わざ」の習得の認知構造について、「自分1」、「自分2」、「自分3」という3つの段階を示している。最初の段階にあたる「自分1」とは、学習者がある「わざ」の世界に入門し、「善いもの」として同意することで、師匠の後について外面的な「形」を模倣し、繰り返しに没頭しているという状態のことである。この段階での学習者は、自分と「形」との関係にのみ焦点を合わせた、自分を中心とした主観的活動を行なっている。「わざ」の習得に関しては、暗黙的要素を含みこむ構造の記述が必要とされていると述べているように、その認知プロセスの構造については述べられていないことが多い。

本研究では、最初の段階にあたる「自分1」に注目している。この段階は、初めてクラシックバレエを経験する初心者が、経験者をひたすら模倣する姿を記録することで検討することができる。模倣するということは、つまり『他者(経験者)を見る』という行為が行われている。経験者と初心者の実践の様子を比較して記述することを試みると共に、その『他者(経験者)を見る』行為が、経験を通してどのように変化するのかについて検討する。

方法

調査内容:本研究の対象としたバーレッスンは、クラシックバレエにおいて必ず行われるものである。特徴として、与えられるパ(ステップ)は、基本的な動作を踏まえて、毎回教師によって新しい組み合わせの振りを与えられる。その都度覚え、その日の新しい組み合わせのパ(ステップ)を通して、身体をウォーミングアップしていく。教師は初心者の生徒に対して、バレエ経験のある経験者を模倣するように促しており、初心者は経験者の間に挟ま

れるように配置され、経験者を模倣することが可能となっている。

対象校: 埼玉県立芸術総合高校

対象者: 第1学年のクラシックバレエの授業におけるダンス経験の全くない初心者2名(以下、初心者A・Bとする)

実践の表示方法: クラシックバレエ歴20年の経験者(筆者)がビデオカメラで捉えた映像を元に、8種類の表示記号を使用し判断した。その際、初心者と経験者の実行行為を比較した。また、他者(経験者)の動作を示すと共に、初心者のテンポのズレの値を示した。

結果

他者(経験者)を見る行為の構造の表示方法として、ズレのない状態「ズレ0」から、2拍のズレに相当する「ズレ2」までの10種類が見出された。さらに、「ズレ0」や動作を行わない場合として、以下の6種類の状態が見出された。

- ①. 反射的応答:パ(ステップ)を始めたばかりの段階で、足は経験者と同時に出ているが曖昧な出し方であったため、他者(経験者)が動くと共に反射的に動いていると考えられる状態。
- ②. 了解反応:「模倣」のズレの値も小さくなり、何度か経験を重ねたことで、パ(ステップ)を理解できる部分が生じたため、他者(経験者)を見る行為が了解した上でなされていると考えられる状態。
- ③. 無反応:「反射的応答」の前後や最後に模倣をやめてしまった部分であり、反応することも難しいと考えられる状態。
- ④. 同調:動作の遅れを減らし、模倣を続けていた部分であり、遅れを取り戻すために振りを

飛ばしたと考えられる状態。

- ⑤. 独立:経験者が前にいない状態。
- ⑥. 独立時の混乱:「独立」の時にパ(ステップ)を振り返って確認している様子が見られた。その間のパ(ステップ)が行われなかった部分に関しては、他者(経験者)が前にいない状態であり、振り返るという行為によって、動作が妨げられたと考えられる状態。

図1、2 は、初心者A、B のズレの平均を練習回数順に表示したものに、他者(経験者)を見る行為の構造過程がどの練習回数に現れたかを表示したものである。

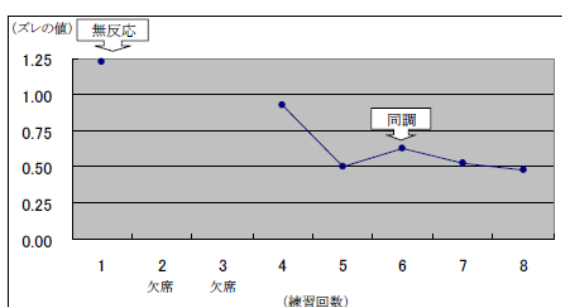


図1. 初心者A

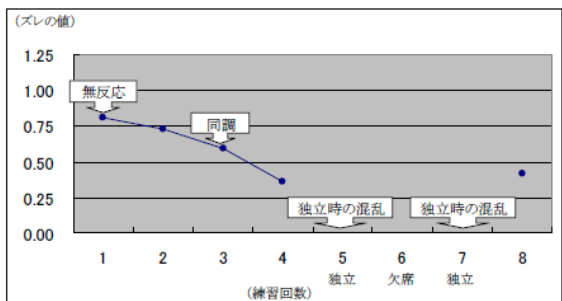


図2. 初心者B

考察

1. 安定期

図1 の5 回目から0.50、0.60 前後を示しているように、ある程度の模倣を繰り返すと、ズレの値が安定していることが分かった。

図2 は徐々にズレの値が低くなり、2 回の「独立」(経験者が前にいない状態)と1 回の欠席の後、0.42のズレの値を示していた。本調査は、実践からのデータのため、他者(経験者)を見る行為を全練習回数で維持することはできなかった。そのため推測にはなるが、「独立」や欠席の後の8回目が、4 回目と近いズレの値を示していることから、初心者B も初心者A のように、4 回目からズレの

値が安定していたのではないかと考えられた。

初心者A は、経験者が前にいない状態、「独立」の機会はなかった。しかし初心者B が、「独立時の混乱」がありながらも「独立」したように、初心者A も同じように、ズレの値が安定している時ならば「独立」が可能であったことも考えられる。

2. 相互作用する発達の構造

ヴィゴツキー(2001)は、発達により前段階の行為はなくなるのではなく、その行為が表立って見えなくなっていることを述べている。本研究で明らかとなった他者(経験者)を見る行為の構造は、段階的にステップを踏み、1 度「独立」の段階まで到達すると、常にその段階にとどまるのではなく、「独立の混乱」により、模倣の段階へ戻ることもある。また、他者(経験者)が前にいれば、模倣に依存する場合もある。つまり、この構造は一方通行ではなく何度も相互作用を繰り返しながら、「独立」に向かっていることが示唆される。

3. 認識の先行

「了解反応」や「独立」の行為の表れは、クラシックバレエのパ(ステップ)に対する認識が高まったため、順番を覚えるという行為に至っていると考えられる。つまりこの半年間で、クラシックバレエへの認識が、「他者(経験者)を見る」という行為の変化により、高まっていたことが明らかとなった。

しかし、認識が高まったことと、実際の動作による技術的な高まりは別物である。新しいパ(ステップ)の組み合わせを認識し、実演しているということで、実演そのものの質については、半年間という期間の中では問にくい段階であると判断できる。よって、本研究の初心者の練習過程では、技術的な面よりも先に、認識が先行していたことが考えられる。

参考文献

- 生田久美子(1987)「わざ」から知る 東京大学出版会
- ヴィゴツキー(2001) 柴田義松(訳)新訳版・思考と言語 新読書社